

筑波大学
社会人のための博士後期課程
「早期修了プログラム」

平成 20 年度 外部評価
総評

筑波大学博士後期課程
早期修了プログラム外部評価委員長
竹内 伸（東京理科大学長）

平成 21 年 9 月 30 日

平成 22 年 2 月 8 日改訂版

【目次】

- 1 外部評価の経緯
- 2 プログラム全体の評価
- 3 各研究科に関する総合評価
- 4 提言

【資料】

- 資料1 外部評価委員名簿
- 資料2 外部評価の概要
- 資料3 外部評価日程
- 資料4 専門委員会報告一覧

1. 外部評価の経緯

平成19年4月から、筑波大学大学院ビジネス科学研究科、システム情報工学研究科、数理物質科学研究科の3研究科において、博士後期課程早期修了プログラムが開始された。さらに平成20年4月から、生命環境科学研究科が新たに加わって4研究科体制となった。本プログラムは、平成19年度入試より学生を募集し、平成19年度は21名、平成20年度は24名の学生が履修を許可されている。

一方で、学位の質保証システムの必要性は、最近様々な分野で認識され、いくつかの分野で実施されている。学位の質保証システムには、教育プログラムの外部評価が、システムの継続的改善のために必須とされている。博士後期課程に対する質保証システムはわが国では他には存在していないが、本プログラムでは、達成度評価を主軸とした学位の質保証システムの外部評価を実施することとなった。

外部評価委員会は、平成19年9月に筑波大学より委嘱された3名に、平成20年度から生命環境科学研究科が新たに加わった関係で、同年1月に新たに1名を委嘱し計4名から構成され、「筑波大学博士後期課程早期修了プログラム外部評価の概要」に沿って行われた。

平成20年度には、第3回外部評価委員会が平成20年7月14日に開催され、外部評価の方法等について議論された。また、数理・システム・ビジネスの3研究科については前年度（又は平成19年度）に設置した専門委員会が引き続き評価を行い、また生命環境科学研究科については新たに専門委員会を設置することとなった。

平成21年2月20日に第4回外部評価委員会を開催し、専門委員会委員も交えて評価手順等について再確認、決定した。

平成21年度には、4月～6月にかけて各専門委員会にて実地視察が行われ、各専門委員会からの評価報告書が提出された。

各専門委員会からの評価報告書を受けて、平成21年8月28日に第5回外部評価委員会を開催し、本総評における本プログラム全体および評価対象の研究科の総合評価は、S, A, B, C, Dの五段階にて評価を行うものとした。ここで、本総評の内容が検討され、平成21年9月9日までに外部評価委員の合意のもと総評案を作成するものとされた。

その後、筑波大学側にて総評に関連する事実を誤認がないことを確認した上で総評を決定することとされた。

総評決定後、評価結果はウェブページ等にて公表することとされた。

2. プログラム全体の総合評価

博士後期課程早期修了プログラム2年目は、受け入れ体制を十分に整えた状態で実施された。その結果、1年目の平成19年度（21名履修、16名修了）と同様に、平成20年度も24名の履修、また17名の修了と、コンスタントに学生数が得られ多くの優秀な博士を輩出できたことは、本プログラムが順調に継続する兆しとして高く評価される。平成20年度に本プログラムに参加した「生命環境科学研究科」についても、本プログラムにおける審査及び自己評価が適切に実施され、優れた人材養成という面で十分な成果が得られたと判断される。

これは、実地視察の結果などから垣間見える、各研究科の履修生確保及び博士の質の保証に関するたゆまぬ努力と、システムとしての学位取得の審査基準の明確さの賜物であろう。本プログラムを継続する意義は高く、他大学への波及効果も期待したい。

今後、引き続き質の高い相当数の学生を確保し、また指導が担当教員任せにならないよう、各研究科・専攻単位で指導システムを更に改善していくことを求めたい。またホームページやリーフレット・大学院案内などの広報資料には、早期修了プログラムそのものが目指す教育目標を示すとともに、履修希望者が十分理解できるよう、簡潔かつ平易に表現することを求めたい。さらに、1年を超えて在籍せざるを得なくなった履修生へのフォローに関する明文化など、十分な情報を発信し、継続可能なシステムとして発展させていくことが望まれる。

なお、達成度評価における人間力教育に関する部分は本来時間を要するので、早期プログラムとして何らかの工夫が必要であると思われる。

以上を踏まえて、平成20年度筑波大学博士後期課程早期修了プログラムの総合評価は

A（優れている）。

3. 各研究科に関する総合評価

(1) ビジネス科学研究科

- 1) 平成 19 年度評価結果について委員と大学側に認識に相違のない事を確認した。
- 2) 評価結果に対し、筑波大学ならびにビジネス科学研究科として対応したことを確認した。
- 3) 平成 20 年度の対象学生が 1 年で修了できなかった件については、博士の学位の質の保証をきちんと行っている点で評価でき、プログラムとしては順調に実施されていることを確認した。ただし、現状 1 年で修了できない場合、早期修了プログラムの枠内でのサポートがなくなる仕組となっている。この点については制度的な改善を検討すべきである。
- 4) 修了生および在學生にインタビューを行い、大学の説明および上記評価と矛盾しないことを確認した。

以上を考慮し、プログラムの実施は順調であり A（優れている）と評価する。

(2) システム情報工学研究科

- 1) このプログラムは、1 年で修了できること、審査基準等が明確に示されていること等の大きなメリットをもつ。
- 2) 修了生も教員も、このプログラムのメリットをフルに活用し、プログラム開始からの 2 年間に、それぞれ 10 人近い優秀な博士課程修了生を送り出してきた。
- 3) また、本プログラムは、通常の博士課程の大学院生にとっても、いい意味での刺激になっている。

上記のことから、このプログラムは有意義であり、是非とも継続していただくとともに、これまでの成果を他大学にも情報発信することにより、同様のプログラムが他大学にも広く波及することを期待する。

以上により、A（優れている）と評価する。

(3) 数理物質科学研究科

下記の理由により、このプログラムは有意義であり、是非とも継続してこれまでの成果を他大学に情報発信することにより、同様のプログラムが広く普及することを期待する。

- 1) このプログラムは 1 年で修了できること、審査基準が明確に示されていること等、社会人にとって大きなメリットをもつ。

2) このプログラムのメリットをフルに活用して、開始から2年間にそれぞれ約10名の優秀な博士課程修了生を送り出す実績が得られた。

3) 本プログラムは、博士課程の大学院生にとっても、いい意味での刺激になっている。

なお、外部委員会からの提言に対して真摯な対応が行われており、総合的にプログラムは改善されつつある。一方で、本プログラムの最大の特徴が8項目の達成度評価を行い総合的な「博士力」を保障することにあるが、この種の達成度の育成が早期（短期）プログラムと整合的であるかという本質的な問題がある。達成度評価をエビデンスでなくイメージで判断せざるを得ない面もあり、改善の余地があろう。

以上により、A（優れている）と評価する。

（4）生命環境科学研究科

在学中の各ステージにおいて審査および自己評価が適切に実施されており、各プロセスをレビューした結果、本プログラムの履修による受講者の成長が非常に良く感じられた。学問的な深まりに加え、教員や学生との交流を通じて培われた人間力の向上が達成されており、「優れた人材の育成」という面で、初年度とはいえ十分な成果が挙げられたものと判断する。

また、本研究科の掲げている明確な学位審査基準は博士の学位の質を十分に保証するものであり、履修者がそれに到達するための道標となった達成度評価システムは非常に有効に機能したものと考える。受講者・修了者の人生にとって学位取得はあくまでも一つの通過点であり、取得後のキャリアパスに関する指導・アドバイスも加わるようになれば、本プログラムはさらに魅力的なものになると期待される。

総合的にみて当プログラムを高く評価する。企業は博士課程修了者を必ずしも採用したがらないが、指導のやり方によっては人間力もある人材が育ち得ると考えている。そこで指導のシステム化による相乗効果により有為な人材を育成すべきと考える。

以上により、A（優れている）と評価する。

4. 提言

本プログラムの今後の運営方法等に関する提言として、以下にいくつかの項目を挙げる。これらについては、筑波大学側の検討と適切な時期における回答を望む。また、以下に述べてはいない事項で、各研究科において専門委員会から指摘された事項についても、検討されたい。なお、本プログラム開始後2年が経過したものの、本プログラムの改善を継続的に進めるシステムが有効に機能しているかどうか判断することは難しい点もあるが、今後さらに継続的な改善がなされることを期待する。

- (1) 筑波大学全学としての早期修了プログラムの教育理念を明示する必要がある。各研究科の大学院としての教育目標は提示されているが、大学が本プログラムを通じて受講者に提供する教育の目標は提示されていない。特に、筑波大学に無関係の履修希望者にも理解してもらえよう、本プログラムのホームページ、大学院案内等に簡潔にわかりやすく教育理念を示すべきである。
- (2) 本プログラムを開設する研究科および専攻の教育目標達成に向けての達成度評価が行われるプロセスは適切であるものの、達成度8項目の再検討・整理の必要性を感じる。特に、**広い視野、国際的通用性**に関する部分は、本来早期修了プログラムになじまないもので、**早期修了プログラム**として何らかの工夫が必要であると思われる。
- (3) 指導内容記録（研究指導ポートフォリオ）をさらに具体的に記述すれば、システム化に一層寄与すると考えられるものの、現状は個々の教員に任されている。昨年度の提言同様、研究指導ポートフォリオ作成にあたり、教員によって記入の仕方にばらつきが出ないように、教員間で情報交換すべきであり、またこれを確実に行うシステムづくりの必要性を感じる。
- (4) 現状1年で修了できない場合、早期修了プログラムの枠内でのサポートがなくなる仕組となっている。現地視察の結果、既に各研究科単位で実質的なサポートがなされていることは確認できた。しかしながら、早期修了プログラムの1年間を終えてからのサポート体制を明文化すべきである。
- (5) 1年で学位を取得できる可能性の高い学生が、学位取得後のキャリアパスに関する悩みを抱える場合もある。キャリアパスの悩みを抱えた学生への就職支援にも配慮をお願いしたい。

付記：「博士後期課程早期修了プログラム」いう新しい試みについての外部評価に当たって、筑波大学博士後期課程早期修了プログラム運営委員会委員長・事務局長をはじめ、本プログラムの企画・運営に関わる各研究科の教員および事務職員が、きわめて周到に評価に必要な資料を準備し、適切に外部評価委員会を企画・運営した。このような筑波大学の真摯な取り組みに対し敬意を表すると同時に、このことがこのプログラムを成功に導くものであると信じる。

(赤字部分は平成22年2月8日外部評価委員会にて改定)

資料

資料 1

筑波大学博士課程早期修了プログラム外部評価委員会委員及び専門委員会委員名簿

【外部評価委員会委員】

| 氏名 | 所属・職名 | 備考 |
|-------|-----------------------------------|----------------|
| ◎竹内 伸 | 東京理科大学 学長 | |
| 片山 恒雄 | 東京電機大学 教授 | 元 防災科学技術研究所理事長 |
| 桑原 洋 | 日立マクセル 相談役 | 元 総合科学技術会議常任議員 |
| 浅島 誠 | 産業技術総合研究所 器官発生工学研究ラボ長 東京大学名誉教授 | |

◎は委員長

【専門委員会委員】

数理物質科学研究科

| 氏名 | 所属・職名 | 備考 |
|-------|---|----|
| ◎竹内 伸 | 東京理科大学 学長 | |
| 平田 照二 | ソニー(株) コアデバイス開発本部 高周波伝送・映像システム開発部門 ALT 部 統括部長 チーフ DE | |
| 増田 茂 | 東京大学 教授 | |

システム情報工学研究科

| 氏名 | 所属・職名 | 備考 |
|--------|------------|----------------|
| ◎片山 恒雄 | 東京電機大学 教授 | |
| 奥野 晴彦 | (社)関東建設弘済会 | 元 国土技術政策総合研究所長 |
| 上田 博唯 | 京都産業大学 教授 | |

ビジネス科学研究科

| 氏名 | 所属・職名 | 備考 |
|-------|------------|----|
| ◎桑原 洋 | 日立マクセル 相談役 | |
| 川島幸之助 | 東京農工大学 教授 | |
| 岩村 充 | 早稲田大学 教授 | |

生命環境科学研究科

| 氏名 | 所属・職名 | 備考 |
|-------|-----------------------------------|----|
| ◎浅島 誠 | 産業技術総合研究所 器官発生工学研究ラボ長 東京大学名誉教授 | |
| 保坂 幸男 | (株)サタケ 専務執行役員 | |
| 細谷 昌樹 | 武田薬品工業(株) 医薬研究本部・開拓研究所 主席研究員 | |

◎は主査

2009年8月28日

筑波大学博士後期課程早期修了プログラム外部評価の概要

1. 趣旨

標記プログラムは、一定の研究業績や能力を有する社会人を対象に、標準修業年限が3年以上である博士後期課程を、大学院設置基準第17条のただし書き(筑波大学大学院学則では第44条に該当)を援用して最短1年で修了し課程博士号を取得させるプログラムである。修了生に授与する博士の学位の質保証を図るために、以下に述べる達成度評価システムを導入する。また、外部評価は、このプログラムの実施が適切に進められているかどうかを評価し、本プログラムの改善をはかることを目的に導入する。

2. 達成度評価について

認証評価や分野別評価においては、達成度評価という用語が二重の意味で用いられている。一つは、教育組織・教員団がその教育目標を適切に達成すべく、システムを運用しているかどうかのプロセスの適否を評価するものである。その場合、教育組織・教員団が公開している資料をもとに、教育プロセスの適切性を評価する。

いま一つは、個々の学生についての教育目標達成状況にまで立ち入って、教育成果の適否を評価するもので、その場合、学生個人の成績なども参照の対象となる。

本プログラムについては、この両方の評価を行う。なお、学生個人の成績まで参照する場合でも、個々の学生自体を評価するのではなく、あくまで教育システムとしてのプログラム自体の評価を実施する。

注：達成度評価と水準評価との違いについて

外部評価を行う場合、評価委員が持つ水準を基準に評価を行うわけではなく、教育組織(研究科・専攻)が定めた基準、すなわち教育目標と達成度、に従って評価を行う。従って、ある評価委員が、水準が低すぎる、あるいは高すぎる、と感じたとしても、教育組織が定めた教育目標に従っていれば、判定は合格となる。ただし、水準が適切でない、と考えられる場合には、そのことを別に意見・コメントとして述べることができる。

3. 達成度評価項目

達成度を評価するために、研究科・専攻特有の教育目標に基づいて、次に示す8つの達成度評価項目を設けている。

- ① 専門基礎：入学者の専門分野について、博士の学位にふさわしいレベルの基礎能力を有しているか。
- ② 関連分野基礎：専門に関連した分野について、専門分野ほど深くはないとしても、博士の学位にふさわしいレベルの基礎能力を有しているか。

- ③ 現実問題の知識: 現実の問題について、博士の学位にふさわしいレベルのセンス・見識を有しているか。
 - ④ 広い視野: 博士の学位にふさわしい視野の広さを有しているか。
 - ⑤ 問題設定から解決まで: 専門的応用能力である問題設定から解決までのプロセスを理解し、具体的解決に導くことができるか。
 - ⑥ プレゼンテーション・コミュニケーション能力: 博士の学位にふさわしいプレゼンテーション能力とコミュニケーション能力を有しているか。
 - ⑦ 国際的通用性: 専門分野において国際的に通用する学識を有しているか。
 - ⑧ 学術的成果: 博士の学位を授与してよいと判定できる学術的成果を有しているか。
- 各研究科・専攻は、その教育目標に関連して、上記 8 項目の達成度を各学生について評価する。評価結果は外部評価委員に提示される。

4. 研究科が準備する資料

原則として次の 3 種類の資料を準備する。

- 4. 1 自己評価書
- 4. 2 自己評価書の添付資料(公開された資料と内部資料の一部)
- 4. 3 実地視察時資料(学生個人の自己達成度評価書、教育組織による各学生の達成度評価書など)

5. 評価委員会

次に示す外部評価委員会と本プログラムを開設する研究科毎の専門委員会の 2 種類から構成する。

5. 1 外部評価委員会

各専門委員会からの評価報告を取りまとめて、総評を作成する。委員長 1 名および委員数名からなる。

5. 2 専門委員会

本プログラムを開設する研究科毎に設置し、次の項目に示す評価を実施する。外部評価委員会委員と兼任することを妨げない。主査 1 名および委員 1~2 名よりなる。

6. 評価の手順

評価は原則として以下の手順に従い毎年実施するものとする。

- 6. 1 実地視察の準備 : あらかじめ、自己評価書と添付資料を専門委員に送付する。実地視察の前に、事前評価を依頼する。

6. 2 実地視察：実地視察は、専門委員会を兼ねて、1日程度で次の内容を実施する。
 - ・専門委員集合、実地視察資料点検、教員面談、学生面談、施設視察(必要な場合)、評価報告案作成
6. 3 各専門委員会主査により専門委員会評価報告書案を実地視察後10日以内に外部評価委員会委員長に送付する。
6. 4 外部評価委員会を開催し、各専門委員会評価報告書を確認し、評価結果の公表範囲等を決定する。
6. 5 外部評価委員会委員長は総評を作成し、専門委員会評価報告書とともに筑波大学に伝達する。
6. 6 事実誤認等がある場合、筑波大学は外部評価委員長と協議する。
6. 7 外部評価委員会委員長は総評を決定する。
6. 8 筑波大学は評価結果を公表する。

7. 評価記入の方法

専門委員会は、別に準備する外部評価シートを利用し、評価対象の研究科についてA(優れている)、B(妥当)、C(改善の余地あり)、D(早急に改善を要す)のいずれかを「判定」欄に記入すると同時に、その根拠を記入する。その他のコメントがあれば、該当欄に記入する。なお、複数の専攻について個別に評価する場合は、それぞれの専攻を区別して適宜記入する。シートは適宜拡大して差し支えない。

シートは上記達成度基準の8項目それぞれについて作成されてはいないが、8項目のいずれかに言及する必要があるときは、根拠の欄に適宜記入するものとする。

各項目についての評価を総合して、評価対象の研究科の総合評価についてA(優れている)、B(妥当)、C(改善の余地あり)、D(早急に改善を要す)のいずれかを「判定」欄に記入すると同時に、その根拠を記入する。指摘事項・コメント欄には、各項目で指摘されなかった本プログラム全体に係る事項等も含めて記入する。

なお、この外部評価シートは、専門委員会評価報告書を兼ねる。

8. 総評

外部評価委員会委員長は、各専門委員会評価報告書を基に、本プログラムの改善について勧告あるいは助言を行うための総評をまとめる。また、本プログラム全体及び評価対象の研究科それぞれについて、S(特に優れている)、A(優れている)、B(妥当)、C(改善の余地あり)、D

(早急に改善を要す)のいずれかの総合評価を行う。総合評価 S および A についてはその理由を示し、総合評価 C、D については、問題点を指摘する。

9. 評価結果への教育組織の対応

総合評価において問題点が指摘された場合、教育組織(研究科・専攻)は、外部評価委員会に対し、次回の評価までに問題点に対処する方法とその時期を示すものとする。また、対処の結果が明らかになった時点で、その結果を外部評価委員会に報告しなければならない。

平成20年度筑波大学博士後期課程早期修了プログラム外部評価日程

- 平成21年2月20日 第4回外部評価委員会
- 平成21年4月～6月 各研究科専門委員会実地視察
- 生命環境科学研究科
平成21年4月3日
- ビジネス科学研究科
平成21年5月11日
- システム情報工学研究科
平成21年6月12日、13日
- 数理物質科学研究科
平成21年6月16日
- 平成21年8月28日 第5回外部評価委員会
- 平成21年9月11日迄 総評案の作成
- 平成21年9月24日迄 総評を決定
- 平成21年9月30日迄 評価結果を公表

専門委員会報告一覧

専門委員会評価記録

| | |
|----------|------------------|
| プログラム名 | 社会人のための早期修了プログラム |
| 研究科名・専攻名 | ビジネス科学研究科企業科学専攻 |
| 実施年月日 | 平成21年5月11日 |

| 専門委員会委員 | 専門委員名 | 専門委員所属 |
|---------|-----------|-----------|
| 1 | 桑原 洋 (主査) | 日立マクセル相談役 |
| 2 | 川島 幸之助 | 東京農工大学教授 |
| 3 | 岩村 充 | 早稲田大学教授 |

出席者 (ビジネス科学研究科)吉田健一・津田和彦・木野泰伸・学生2名 (早期修了プログラム事務局)辰巳泰我 他関係事務

評価の概要

| |
|--|
| <p>実施事項</p> <p>概要: 平成20年度の筑波大学ビジネス科学研究科博士早期修了プログラムに関して、平成19年度の評価結果をベースに平成20年度の実施状況を調査し、順調でありA(優れている)と評価した。</p> <p>評価実施項目: 1. 平成19年度評価結果の確認 2. 上記評価結果に対する筑波大学ならびにビジネス科学研究科としての対応説明 3. 平成20年度 学生指導結果報告 4. 修了生・在学生インタビュー</p> <p>評価結果: 1. 平成19年度評価結果について委員と大学側に認識に相違のない事を確認した。 2. 評価結果に対し、筑波大学ならびにビジネス科学研究科として対応した事を確認した。 3. 平成20年度の対象学生が1年で修了できなかった件については、博士の質の保証をきちんと行っている点で評価でき、プログラムとしては順調に実施されている事を確認した。ただし、現状1年で修了できない場合、早期修了プログラムの枠内でのサポートがなくなる仕組となっている。この点については制度的な改善を検討すべきである。 4. 修了生および在学生にインタビューを行い、大学の説明および上記評価と矛盾しない事を確認した。 以上を考慮し、プログラムの実施は順調でありA(優れている)と評価した。</p> <p style="text-align: right;">以上</p> |
|--|

平成20年度 筑波大学博士後期課程「社会人のための早期修了プログラム」外部評価シート(ビジネス科学研究科)

注1: 判定は, A(すぐれている), B(妥当), C(改善の余地あり), D(早急に改善が必要)のいずれか

評価者: ビジネス科学分野外部評価
 専門委員会(桑原洋委員長、川島幸
 之助委員、岩村充委員)

20年度外部評価事項については青の背景にて19年度との違いを記述。
 白地部分は19年度評価項目。
 19年度A,B評価の部分は、特に問題の指摘のあった部分のみ記述。

| 番号 | 評価項目 | 判定 | 根拠・指摘事項 | その他のコメント・問合せ事項 |
|-----|-----------------------------|-----------|---|--|
| 1 | 教育目標 | | | |
| 1.1 | 教育目標が公開され、周知されているか | B(妥当) | 教育目標や早期修了プログラムの狙いは適切であり、魅力的である。博士早期修了プログラムのホームページ http://www.souki.tsukuba.ac.jp/ にて適切に公開されている。 | せっかくの良いプログラムなのに、まだ知らない企業も多いと思う。民間企業等に対しては大学側からもっと積極的に広報することを期待したい。 |
| | | B(妥当) | WWWによる情報発信整備の状況と、電子情報通信学会への解説記事投稿など、大学としての取り組みの説明を受け、広報活動の拡大を確認した。 | |
| 1.2 | 教育目標は博士課程として適切であるか | B(妥当) | 専攻としては、今までに20名を超える起業家、90人強の大学教員を始めとし、実社会で活躍する多数の修了生を輩出しており、博士課程として適切と考えるが、専攻としては早期修了プログラム導入前の実績である。今後も、この新しいプログラムの影響を含め継続的にウォッチしていく必要がある。 | |
| 2 | カリキュラム | | | |
| 2.1 | プログラムの趣旨に沿ったカリキュラムが準備されているか | B(妥当) | プログラム履修者(A氏及びT氏)の選択可能カリキュラムの内容、実際選択した講義科目受講状況を確認し、適正に行われていることを確認した。 | |
| | | A(すぐれている) | 20年度の対象学生が1名である事の説明を受けた。その1名が1年で修了できなかったことの説明を受け、「博士の質保証をきちんと行っている」と評価した。 | |

| 番号 | 評価項目 | 判定 | 根拠・指摘事項 | その他のコメント・問合せ事項 |
|-----|------------------------------|------------|--|---|
| 3 | 学生募集 | | | |
| 3.1 | 学生募集にあたり、プログラムの趣旨を公開・説明しているか | C(改善の余地あり) | 課程博士のプログラムであるが、実体は論文博士の審査を申し込めるレベルに近い希望者でないと履修者にとって厳しいプログラムである。大学全体としてその事を事前に公表する資料等で明記が必要である。 本プログラムのホームページhttp://www.souki.tsukuba.ac.jp/に掲載されている情報(特に履修要件/良くある質問)のより一層の充実が求められる。合格者に送られる早期履修の案内などを公表していくべきである。 | |
| | | B(妥当) | 指摘に従い改良したホームページ及び早期修了プログラムリフレットについて説明を受け、指摘事項が改善されたことを確認した。 | |
| 3.2 | プログラムの趣旨に沿った履修資格審査が実施されているか | A(すぐれている) | 3名の履修希望に対して、履修資格審査が行われ、2名が適格、1名が不適格と判定され、適格と判定された2名に関して早期修了プログラムによる教育をおこない、最終的に2名とも所定の1年で学位を取得した。 また不適格とされた1名は通常の3年コースでの履修を行っている。 履修資格認定の審査は適正に行われている。 | |
| | | | 20年度の対象学生が1名である事と、その履修資格認定の説明をうけた。 | |
| 4 | 教員組織・指導方法 | | | |
| 4.1 | 指導に十分な教員組織が存在するか | A(すぐれている) | 特定教員の努力に頼っている部分が多いが、指導は十分できている。また、学生側から見た大きな問題はない。 | T氏の年間mail総数(学生→教員233通、教員→学生288通、うち添付ファイル付き92通)、A氏の年間mail総数(学生→教員122通、教員→学生90通、うち添付ファイル付き59通)など、明らかに教員の負荷の高いプログラムであるので、今後も長期にわたって継続する際して教員の負荷を削減する支援が必要であろう。 |
| | | A(すぐれている) | 参加教員の増員など、「特定教員の努力」だけでなく、組織的にも対応を図っていることの説明を受け、改善されていると判定した。 | |
| 4.2 | 指導体制は適切であるか。複数指導制が機能しているか | A(すぐれている) | 履修した2名の学生ともに6月9日の研究計画発表、9月11日のサバイ・中間・ドラフト発表をへて、3月に学位を授与された。 この間A氏の論文ドラフトに予備指導の段階で多数のコメントがついた事など複数指導制が機能したことを資料に基づき確認した。 | |
| | | | 20年度の対象学生1名の指導体制の説明をうけた。 | |

| 番号 | 評価項目 | 判定 | 根拠・指摘事項 | その他のコメント・問合せ事項 |
|-----|---------------------------------------|-------|---|--|
| 4.3 | 教員間の連絡組織が機能しているか | B(妥当) | 対象者は2名であり、早期修了プログラムに対する特別の連絡組織は準備されなかったが、月1回開催される通常の教育問題等検討委員会、および、適時開催される教育担当教員の打ち合わせにより、必要な連絡は実施されたと判断できる。 | |
| | | | 20年度制度に關与している教員組織と事務組織の説明を受けた。 | |
| 4.4 | 指導方法のシステム化は検討されているか(指導方法はシステム化されているか) | B(妥当) | 専攻全体としてステップ制の整備は進んでいるが、早期修了プログラムに限れば各ステップの通過要件が提供されているだけであり、複数ステップを同時に通過する事が求められている。 今年度は少数で、且、レベルの高い学生が対象であったこともあり、各ステップを問題なく通過できていることが確認された。 | 今後、早期修了プログラムに合わせてステップ制の見直し、レベルの高い学生の確保の仕組み、多少教育の手間のかかる学生が対象になった場合の教育方法の検討など、レベル維持の努力が必要になろう。 |
| | | B(妥当) | 今までどおり、入試を厳密に行い、優秀な学生の確保に努める方針であることの説明を受け、問題をださぬよう運営する強い意志を確認した。 | |
| 5 | 教育環境 | | | |
| 5.1 | 当該プログラム実施のための設備は十分である | B(妥当) | 社会人学生の履修に有利な東京キャンパスを利用。 | |
| 5.2 | 当該プログラム実施のための支援体制は十分であるか | B(妥当) | 大学全体の取り組みとして支援室および大学院課から支援を受けているが、より充実した人的及び経済的支援が望まれる。 | 教材作成経費・サバティカル中の教員による遠隔指導支援経費など、当該プログラムに対するより充実した支援が望まれる。 |
| | | B(妥当) | 予算の状況と支援室の増員、大学としても経費などの面から支援している現状の説明を受け、強化されていることを確認した。 | |
| 6 | 履修 | | | |
| 6.1 | プログラムの趣旨に沿った履修管理と履修指導が行われているか | B(妥当) | 教員学生間のmail指導経過、ドラフト審査記録、審査発表会資料等、審査経過資料を確認し、それ以外の指導についても、指導教員および学生に口頭でインタビューを行い、適正に行われている事を確認した。 | |
| 6.2 | 学生に対する達成度評価は適切になされている | B(妥当) | 自己評価シートの改定状況を、教務係が記録を保持／管理している事を確認した。 | |
| 6.3 | 各学生は達成度について自己評価を継続的に行っているか | B(妥当) | 上記記録の確認を行い、進捗にあわせて学生が自己評価シートを改定し、審査委員会に認定を受けている事を確認した。 | |
| 7 | 学位審査 | | | |

| 番号 | 評価項目 | 判定 | 根拠・指摘事項 | その他のコメント・問合せ事項 |
|-----|---------------------------|-----------|--|----------------|
| 7.1 | 学位審査の基準と審査方法は適切であるか | A(すぐれている) | 学位審査の客観性と学位の水準を保つ為に外部に審査員を依頼する(A氏農工大寺田教授、T氏と島根大高橋准教授)などの仕組みを整備している。 | |
| | | | 20年度の対象学生が1名である事の説明を受けた。その1名が1年で修了できなかったことの説明を受け、「博士の質保証をきちんと行っている」ことを確認した。 | |
| 8 | 継続的改善 | | | |
| 8.1 | 継続的改善のためのシステムが存在し、機能しているか | A(すぐれている) | H19年度の試行結果をふまえ、教育問題等検討委員会でH20年度における規則改定(達成度評価結果の公平性担保に関する規則改訂)を行うなど、初年度については、継続的改善のためのシステムは機能した。 | |

| 番号 | 評価項目 | 判定 | 根拠・指摘事項 | その他のコメント・問合せ事項 |
|----|----------------|-------|---|----------------|
| 9 | 総合評価 | 判定 | その他のコメント・問合せ事項 | コメント・問合せ事項 |
| | 総合的にみたプログラムの評価 | B(妥当) | <p>1年間での学位取得は学生及び担当教員にとってかなり厳しい。特定教員に負荷が集中しないように教員組織をより充実する事が望まれる。</p> <p>また継続的な施策になるよう今後も努力を継続する必要がある。</p> <p>総合的に判断すると、初年度は対象学生の質が高かったことと関係する教員の熱意、努力により順調に指導が行われたことが確認できたが、今後、初年度並みの高いレベルの学生の確保や、より多くの教育を要する学生に対する指導方法の検討などが望まれる。</p> <p>早期修了プログラム全般に関することであるが、学術的なものは確実な運営が図られればよいが、指導教員と学生個人との間の人間力教育に係わる場所は、どうしてもある程度の時間をかけて行う必要がある。これは通常の博士課程においては自然に行われることが多いのであるが、早期修了プログラムでは、時間に限界があるので何らかの工夫が必要と思われる。ここをしっかりと教育プログラムとして遂行することの決意と実行を期待したいし、これを、何らかの評価対象として来年以降加えることを提案したい。例えば、学生に欠けている、あるいは弱いところを議論し同定し、ここについては学生と教員団がお互いに意識を持って啓蒙、高める努力を重ねるプログラムを計画し実行することなども一考に値する。博士にはこの二面が期待されているのであるから。</p> | |
| | | B(妥当) | 大学院共通科目について人間力養成の観点から講義の趣旨の説明を受けた。この点に意識が向いてきたのは大いに評価できる。しかし、さらに強化する余地があり、今後期待したい。 | |

専門委員会評価記録

| | |
|----------|------------------|
| プログラム名 | 社会人のための早期修了プログラム |
| 研究科名・専攻名 | 数理物質科学研究科 |
| 実施年月日 | 平成21年6月16日 |

| 専門委員会委員 | 専門委員名 | 専門委員所属 |
|---------|-----------|-------------------|
| 1 | 竹内 伸 (主査) | 東京理科大学 学長 |
| 2 | 平田 照二 | ソニ (株) コアデバイス開発本部 |
| 3 | 増田 茂 | 東京大学 |

| | |
|-----|--|
| 出席者 | (数理物質科学研究科)村上浩一・秋本克洋・宮本雅彦・指導教員・学生2名 (早期修了プログラム事務局)喜多英治・辰巳泰我 他関係事務 |
|-----|--|

評価の概要

| |
|--|
| <p>実施事項</p> <p>開催日時:平成21年6月16日(火)10:30~16:00 開催場所:筑波大学総合研究棟B棟202 204室</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大学側担当者との審査スケジュール確認 ・早期修了プログラム担当教員による実施状況説明 ・実地視察時資料確認 ・早期修了プログラム履修生インタビュー (2名) ・指導教員インタビュー (2名) ・意見交換 |
|--|

平成20年度 筑波大学博士後期課程「社会人のための早期修了プログラム」外部評価シート(数理工学科学研究科)

注1: 判定は, A(すぐれている), B(妥当), C(改善の余地あり), D(早急に改善が必要)のいずれか

評価者: 数理工学科学研究科外部評価専門委員会(竹内委員長、平田委員、増田委員)

| 番 | 評価項目 | 判定 | 根拠・指摘事項 | その他のコメント・問合せ事項 |
|-----------------|------------------------------|----|--|---|
| 1 教育目標 | | | | |
| 1.1 | 教育目標が公開され、周知されているか | A | 教育目標は提示されている。 | ウェブサイトの専攻ごとの記述方法を揃え、分かり易く表示したほうがよい。 |
| 1.2 | 教育目標は博士課程として適切であるか | C | 自己評価書p.5の「3年間の教育研究を1年で実施する必要があります」を削除したものの、資料1-4のパフレットの表紙の記述に達成度評価システムの内容が欠落していること、p.1,6行目に資格の判断基準として「一定の研究業績」としか記述されていないなど、舌足らずで、本プログラムの趣旨が正しく表現されていない。3年課程をないがしろにするイメージをもたれないよう加筆修正が必要である。 | |
| 2 カリキュラム | | | | |
| 2.1 | プログラムの趣旨に沿ったカリキュラムが準備されているか | A | 多様なカリキュラムが提示されている。 | ヒアリングの結果、極めて有効に活用した履修生と、時間の都合であまり活用できなかった履修生が混在することがわかった。 |
| 3 学生募集 | | | | |
| 3.1 | 学生募集にあたり、プログラムの趣旨を公開・説明しているか | B | ウェブサイトを中心とした公開・説明は昨年に比べ充実した。さらに、いかに簡潔に分かり易く説明するかを工夫し、単に資料をウェブで公開する以上の努力を期待したい。 | |
| 3.2 | プログラムの趣旨に沿った履修資格審査が実施されているか | C | 達成度評価法について文書上の改訂は無いので、昨年提言した達成度8項目の再検討・整理の内容が不明である。 | |

| 番 | 評価項目 | 判定 | 根拠・指摘事項 | その他のコメント・問合せ事項 |
|-----|---------------------------------------|----|---|------------------------------|
| 4 | 教員組織・指導方法 | | | |
| 4.1 | 指導に十分な教員組織が存在するか | A | 十分な教員組織が存在する。 | ただし、個々の教員の努力に頼りすぎている傾向も見られる。 |
| 4.2 | 指導体制は適切であるか。複数指導体制が機能しているか。 | A | 修了者へのヒアリングにより確認した。 | 隣接分野の教授からのより積極的な指導を活用してはどうか。 |
| 4.3 | 教員間の連絡組織が機能しているか | A | 中間報告書と実施視察により確認した。 | |
| 4.4 | 指導方法のシステム化は検討されているか(指導方法はシステム化されているか) | B | フォーマットが作成され、改善されている。ただし、指導結果をさらに具体的に記述すれば、システム化に一層寄与すると考えられる。 | |
| 5 | 教育環境 | | | |
| 5.1 | 当該プログラム実施のための設備は十分であるか | A | 設備は十分であり、今年度はe learningシステムに関しても教材等の充実が見られる。 | 履修生がどのように活用しているのかの調査が必要である。 |
| 5.2 | 当該プログラム実施のための支援体制は十分であるか | A | 事務局が設置され、事務員は3人に増強され、さらに昨年同様研究科の事務員全体の支援もあり十分な体制である。 | |

| 番 | 評価項目 | 判定 | 根拠・指摘事項 | その他のコメント・問合せ事項 |
|-----|-------------------------------|----|---|------------------------------------|
| 6 | 履修 | | | |
| 6.1 | プログラムの趣旨に沿った履修管理と履修指導が行われているか | B | 修了者及び教員へのヒアリングにより、それぞれの指導教員が多くの工夫を凝らしていることが確認できた。ただし、昨年も指摘したが、評価項目数とレベル段階は再考してはどうか。 | |
| 6.2 | 学生に対する達成度評価は適切になされているか | A | 修了者及び教員へのヒアリングにより確認した。 | 達成度評価の回数は妥当であり、負担量も適切であるとの意見が多かった。 |
| 6.3 | 各学生は達成度について自己評価を継続的にしているか | B | 修了者へのヒアリングにより確認した。自己評価に学生の進捗状況が反映されることを期待する。 | |
| 7 | 学位審査 | | | |
| 7.1 | 学位審査の基準と審査方法は適切であるか | B | 修了者及び教員へのヒアリングと資料の確認により、達成度評価も適切に行われ、質の高い論文が完成していることを確認した。昨年の提言である、透明性確保のためになるべく外部専攻の審査員を加えることへの対応の努力は見られる。 | |
| 8 | 継続的改善 | | | |
| 8.1 | 継続的改善のためのシステムが存在し、機能しているか | A | 継続的な改善のシステムがあり、機能している。早期修了プログラム運営委員会議事録等により改善の努力が行われていることを確認した。 | 本外部評価委員会の責任は重い。 |

| 番 | 評価項目 | 判定 | 根拠・指摘事項 | その他のコメント・問合せ事項 |
|---|----------------|----|--|----------------|
| 9 | 総合評価 | 判定 | その他のコメント・問合せ事項 | コメント・問合せ事項 |
| | 総合的にみたプログラムの評価 | A | <p>下記のさまざまな理由により、このプログラムは有意義であり、是非とも継続してこれまでの成果を他大学に情報発信することにより、同様のプログラムが広く普及することを期待する。</p> <p>1)このプログラムは1年で終了できること、審査基準が明確に示されていること等、社会人にとって大きなメリットをもつ。</p> <p>2)このプログラムのメリットをフルに活用して、開始から2年間にそれぞれ約10名の優秀な博士修了生を送り出す実績がえられた。</p> <p>3)本プログラムは、課程博士の大学院生にとっても、いい意味での刺激になっている。</p> <p>なお、外部委員会からの提言に対して真摯な対応が行われており、総合的にプログラムは改善されつつある。一方で、本プログラムの最大の特徴が8項目の達成度評価を行い総合的な「博士力」を保障することにあるが、この種の達成度の育成が早期(短期)プログラムと整合的であるかという本質的な問題がある。達成度評価をエビデンスでなくイメージで判断せざるを得ない面もあり、改善の余地があろう。</p> | |

専門委員会評価記録

| | |
|----------|------------------|
| プログラム名 | 社会人のための早期修了プログラム |
| 研究科名・専攻名 | システム情報工学研究科 |
| 実施年月日 | 平成21年6月12日、13日 |

| 専門委員会委員 | 専門委員名 | 専門委員所属 |
|---------|------------|------------|
| 1 | 片山 恒雄 (主査) | 東京電機大学 |
| 2 | 上田 博唯 | 京都産業大学 |
| 3 | 奥野 晴彦 | (社)関東建設弘済会 |

| | |
|-----|---|
| 出席者 | (システム情報工学研究科)大田友一・村上正秀・木村成伴・橋本昭洋・糸井川栄一・北川博之・森田昌彦・山田恭央・指導教員5名・学生5名 (早期修了プログラム事務局)喜多英治・辰巳泰我 他関係事務 |
|-----|---|

評価の概要

| |
|---|
| <p>実施事項</p> <p>開催日時:平成21年6月12日9:30~17:00、13日9:00~12:15 開催場所:筑波大学共同利用棟A301 2室</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大学側担当者との審査スケジュールの確認 ・担当教員からの実施状況説明 ・実地視察時資料確認 ・早期修了プログラム履修生インタビュー ・担当教員インタビュー ・意見交換 <p>#片山委員:書面による出席</p> |
|---|

平成20年度 筑波大学博士後期課程「社会人のための早期修了プログラム」外部評価シート (システム情報工学研究科)

注1: 判定は、A(すぐれている)、B(妥当)、C(改善の余地あり)、D(早急に改善が必要)のいずれか

評価者: システム情報工学研究科外部
評価専門委員会(片山委員長、上田委員、奥野委員)

| 番号 | 評価項目 | 判定 | 根拠・指摘事項 | その他のコメント |
|----------|------------------------------|----|---|--|
| 1 教育目標 | | | | |
| 1.1 | 教育目標が公開され、周知されているか | B | 教育目標は提示されている。 | ウェブサイトの専攻ごとの記述方法を揃え、わかりやすく表示したほうがいいのでは。 |
| 1.2 | 教育目標は博士課程として適切であるか | B | ウェブサイトの大幅な見直しが行なわれた。 | 大学院としての目標は提示されているが、早期修了プログラムの目標について示しておく必要はないのか。 |
| 2 カリキュラム | | | | |
| 2.1 | プログラムの趣旨に沿ったカリキュラムが準備されているか。 | A | 多様なプログラムが準備されている。 | ヒアリングの結果、きわめて有効に活用した履修生と、時間の都合であまり活用できなかった履修生が混在することがわかった。 |
| 3 学生募集 | | | | |
| 3.1 | 学生募集にあたり、プログラムの趣旨を公開・説明しているか | B | ウェブサイトを中心とした公開・説明は昨年に比べ充実した。次のステップは、同じ内容をいかに簡潔に分かりやすく説明するかの工夫であり、従来の資料をウェブで公開する以上の努力を期待したい。 | |
| 3.2 | プログラムの趣旨に沿った履修資格審査が実施されているか | B | 不合格の事例・その理由などをヒアリングで確認し、妥当と判断した。 | |

| 4 教員組織・指導方法 | 判定 | 根拠・指摘事項 | その他のコメント |
|-----------------------------------|----|--|------------------------------------|
| 4.1 指導に十分な教員組織が存在するか | A | 指導に十分な教員組織が存在する。 | ただし、個々の教員の努力に頼りすぎている傾向もみられる。 |
| 4.2 指導体制は適切であるか。複数指導体制が機能しているか。 | B | 修了者へのヒアリングにより確認した。 | 隣接分野の教授からのより積極的な指導を活用してはどうか。 |
| 4.3 教員間の連絡組織が機能しているか | B | 修了者と教員へのヒアリングにより確認した。 | |
| 4.4 指導方法のシステム化は検討されているか | B | 研究指導ポートフォリオにより確認した。ただし、指導結果をさらに具体的に記述すれば、システム化に一層寄与すると考えられる。 | |
| 5 教育環境 | | | |
| 5.1 当該プログラム実施のための設備は十分であるか | A | 設備は十分であり、今年度はe learningシステムに関しても教材等の充実がみられる。 | 履修生がどのように活用しているかの調査が必要。 |
| 5.2 当該プログラム実施のための支援体制は十分であるか | A | 運営事務局の設置も検討されており、支援体制は十分である。 | |
| 6 履修 | | | |
| 6.1 プログラムの趣旨に沿った履修管理と履修指導が行われているか | A | 修了者及び教員へのヒアリングにより、それぞれの指導教員が多くの工夫を凝らしていることが確認でき、いずれも適切と思われた。 | |
| 6.2 学生に対する達成度評価は適切になされているか | B | 修了者及び教員へのヒアリングにより確認した。 | 達成度評価の回数は妥当であり、負担量も適切であるとの意見が多かった。 |
| 6.3 各学生は達成度について自己評価を継続的に行っているか | B | 修了者へのヒアリング及び達成度評価一覧により確認した。 | |

| 7 学位審査 | | 判定 | 根拠・指摘事項 | その他のコメント |
|---------|---------------------------|----|---|----------|
| 7.1 | 学位審査の基準と審査方法は適切であるか | A | 修了者及び教員へのヒアリングと資料の確認とにより、達成度評価も適切に行われ、質の高い論文が完成していることを確認した。 | |
| 8 継続的改善 | | 判定 | 根拠・指摘事項 | その他のコメント |
| 8.1 | 継続的改善のためのシステムが存在し、機能しているか | B | 早期修了プログラム運営委員会 議事録等により改善の努力が行われていることを確認した。また、昨年に比べて、ホームページも見やすくなっている。 | |

| 9 総合評価 | | 判定 | 指摘事項 | コメント |
|--------|----------------|----|---|------|
| | 総合的にみたプログラムの評価 | A | <p>1)このプログラムは、1年で修了できること、審査基準等が明確に示されていること等の大きなメリットをもつ。</p> <p>2)修了生も教員も、このプログラムのメリットをフルに活用し、プログラム開始からの2年間に、それぞれ10人近い優秀な博士課程修了生を送り出してきた。</p> <p>3)また、本プログラムは、通常の課程博士の院生にとっても、いい意味での刺激になっている。</p> <p>上記のことから、このプログラムは有意義であり、是非とも継続していただくとともに、これまでの成果を他大学にも情報発信することにより、同様のプログラムが他大学にも広く波及することを期待する。</p> | |

専門委員会評価記録

| | |
|----------|------------------|
| プログラム名 | 社会人のための早期修了プログラム |
| 研究科名・専攻名 | 生命環境科学研究科 |
| 実施年月日 | 平成21年4月3日 |

| 専門委員会委員 | 専門委員名 | 専門委員所属 |
|---------|-----------|-------------------------------|
| 1 | 浅島 誠 (主査) | 産業技術総合研究所 器官発生工学ラボ長・東京大学 名誉教授 |
| 2 | 保坂 幸男 | (株)サタケ 専務執行役員 |
| 3 | 細谷 昌樹 | 武田薬品工業(株)医薬研究本部・開拓研究所 主席研究員 |

| | |
|-----|--|
| 出席者 | (生命環境科学研究科)田瀬則雄・白岩善博・繁森英幸・中村幸治・沼田治・佐竹隆・指導教員2名・学生2名 (早期修了プログラム事務局)辰巳泰我 他関係事務 |
|-----|--|

評価の概要

| |
|---|
| <p>実施事項</p> <p>開催日時:平成21年4月3日13:30~16:00 開催場所:筑波大学総合研究棟A棟205室 早期修了プログラムWGによる早期修了プログラムの概要の説明。 指導担当教員による実施状況の説明。 専門委員による指導担当教員へのインタビュー。 専門委員による修了者へのインタビュー。 報告書作成に伴う総合質疑応答。 専門委員と委員会参加教職員との意見ならびに情報交換。</p> |
|---|

平成20年度 筑波大学博士後期課程「社会人のための早期修了プログラム」外部評価シート (生命環境科学研究科)

注1: 判定は、A(すぐれている)、B(妥当)、C(改善の余地あり)、D(早急に改善が必要)のいずれか

評価者: 生命環境科学研究科外部評価専門委員会(浅島委員長、保坂委員、細谷委員)

| 番号 | 評価項目 | 判定 | 根拠・指摘事項 | その他のコメント |
|-----|------------------------------|----|---|---|
| 1 | 教育目標 | | | |
| 1.1 | 教育目標が公開され、周知されているか | A | 生命環境科学研究科の教育目標は専攻ごとにHP上で適切かつ恒常的に公開されており、受講希望者にとっての利便性が十分に図られている。 | 筑波大学全学としての早期修了プログラムの教育目標に関しては、HPやパンフレットを見る限りいずれも「がんばる社会人の応援」や「最短1年での学位取得」とは記載されているものの、教育面での具体的な目標は明示されていない。学位取得はあくまでも最終結果であって、大学が本プログラムを通じて受講者に提供する教育の目標はどこにあるのか明確に示す必要がある。 |
| 1.2 | 教育目標は博士課程として適切であるか | A | 専攻ごとに特色を生かした教育目標が掲げられているが、いずれも究極は「優れた人材の育成」を目指すものであり、社会人を対象とした博士課程にふさわしい内容となっている。 | |
| 2 | カリキュラム | | | |
| 2.1 | プログラムの趣旨に沿ったカリキュラムが準備されているか。 | A | 学問的な分野の幅広さに加え、基礎から応用までの深みのあるカリキュラムが準備されている。講義やセミナーによる関連分野の知識や、外部の研究機関との連携による教育・研究の機会の提供など、社会人としてさらなるステップアップが期待できるような内容が十分に盛り込まれている。 | |
| 3 | 学生募集 | | | |
| 3.1 | 学生募集にあたり、プログラムの趣旨を公開・説明しているか | A | 早期修了プログラムのHPの公開やパンフレットの配布、学術雑誌への広告の掲載、秋葉原や企業へ出向いての説明会など、プログラムの趣旨を公開・説明するための様々な工夫が行なわれている。 | |
| 3.2 | プログラムの趣旨に沿った履修資格審査が実施されているか | A | 履修資格の基準が明確に提示され、入学前には学生が作成した達成度評価シートなどによる点検、資格審査が行なわれている。また、事前相談の窓口も用意されており、それぞれの受講希望者の現状やレベルに合わせたきめ細かな対応ができています。 | |
| 4 | 教員組織・指導方法 | | | |

| 番号 | 評価項目 | 判定 | 根拠・指摘事項 | その他のコメント |
|-----|-------------------------------|----|---|----------|
| 4.1 | 指導に十分な教員組織が存在するか | A | 各専攻には様々な専門分野にわたって経験豊富な教員が在籍し、副指導教員制による指導協力体制がきちんと確立されている。 | |
| 4.2 | 指導体制は適切であるか。複数指導制が機能しているか | A | 副指導教員体制では異なる専門分野の教員が組み入れられており、研究上のアドバイスや研究手法や知識の習得などの面で受講者にとっての大きなメリットとなっている。本年度は、「これまでに経験のなかった分野の手法や知識を副指導教員から指導を受けたことによって学位論文のレベルアップが達成された」などの実例がヒアリングによって確認された。 | |
| 4.3 | 教員間の連絡組織が機能しているか | A | 教授会、生物系専攻合同教員会議、研究指導担当教員会議など、教員同士の定期的な会合が行なわれており、特に研究指導担当教員会議では専攻内における審査経過が報告され、問題点があれば議論が行なわれている。 | |
| 4.4 | 指導方法のシステム化は検討されているか | B | 達成度評価と審査のプロセスがきちんと確立されており、また、専攻ごとに指導教員をバックアップする体制も用意されている。各学生の状況に合わせた指導は重要であるが、必然的に主担当教員や専攻に依存する部分が大きくなり、生命環境科学研究科全体としての統一性に欠ける恐れがある。指導のプロセス・内容・方法などに関しても、教員・受講生の双方に分かりやすく標準的なスキームが生命環境科学研究科全体として設定できるようであればなお良い。更なるシステム化により指導力の相乗効果的向上を図ると共に、マイナス側へ片寄った学生の産出を無くすべきである。 | |
| 5 | 教育環境 | | | |
| 5.1 | 当該プログラム実施のための設備は十分であるか | A | 研究設備や教育機器、講義室、セミナー室などが十分に用意されている。 | |
| 5.2 | 当該プログラム実施のための支援体制は十分であるか | A | 本プログラムに対しての専攻科をあげての教員の協力、ならびに大学全体として支援室および大学院課からの支援が行なわれている。 | |
| 6 | 履修 | | | |
| 6.1 | プログラムの趣旨に沿った履修管理と履修指導が行われているか | A | 研究指導教員からは研究室のセミナーなどの機会を通じて定期的な履修指導が行なわれており、各審査・評価のステージにおいても主指導・副指導の複数の教員による履修指導が適切に行なわれている。 | |
| 6.2 | 学生に対する達成度評価は適切になされているか | A | 各審査の段階で学生の達成度評価を実施しており、記録の公平性だけでなく、保管や透明性についても配慮が十分にされている。 | |

| 番号 | 評価項目 | 判定 | 根拠・指摘事項 | その他のコメント |
|-----|----------------------------|----|---|----------|
| 6.3 | 各学生は達成度について自己評価を継続的に行っているか | A | 学生は各審査の段階で自己評価シートを作成し、指導教員や専攻長はその内容を精査するとともに、専攻教務係において適切に保管・管理されている。 | |
| 7 | 学位審査 | | | |
| 7.1 | 学位審査の基準と審査方法は適切であるか | A | 学位審査基準は明確化されている。学位審査は基準に従って公正かつ厳格に行なわれており、最終的な学位取得資格の認定は生命環境科学研究科運営委員会で審議・承認されている。 | |
| 8 | 継続的改善 | | | |
| 8.1 | 継続的改善のためのシステムが存在し、機能しているか | A | 生物系3専攻合同委員会によってプログラムの実施状況と体制、規定などについて常にチェックを行なっている。外部評価専門委員会メンバーと教員との面談の機会を利用し、積極的な意見交換によって、システムの改善やさらなるレベルアップのアイデアなどが話し合われた。 | |

| 9 | 総合評価 | 判定 | 指摘事項 | コメント |
|---|----------------|----|--|------|
| | 総合的にみたプログラムの評価 | A | <p>在学中の各ステージにおいて審査および自己評価が適切に実施されており、各プロセスをレビューした結果、本プログラムの履修による受講者の成長が非常に良く感じられた。学問的な深まりに加え、教官や学生との交流を通じて培われた人間力の向上が達成されており、「優れた人材の育成」という面で、初年度とはいえ十分な成果が挙げられたものと判断する。また、本研究科の掲げている明確な学位審査基準は博士の学位の質を十分に保証するものであり、受講者がそれに到達するための道しるべとなった達成度評価システムは非常に有効に機能したものであると考える。受講者・修了者の人生にとって学位取得はあくまでも一つの通過点であり、取得後のキャリアパスに関する指導・アドバイスも加わるようになれば、本プログラムはさらに魅力的なものになると期待される。総合的にみて当該プログラムを高く評価する。企業は博士課程卒業者を必ずしも採用したがらないが、指導のやり方によっては人間力もある人材が育ち得ると考えている。そこで指導のシステム化による相乗効果により有為な人材を育成すべきと考える。</p> | |